

宇多津古街における景観形成の向上に関する研究

研究年度・期間：平成 26 年度

研究ディレクター：杉本 真一
(建築学科准教授)

会計責任者：吉原 卓男
(建築学科教授)

学外共同研究者：川村 真次
(デザイン学科各員教授)

北 丈夫
(建築学科非常勤講師)

研究補助者：浅野 秀幸
(宇多津町地域整備課)

蛭子 智成
(宇多津町政策調整室)

岡田 茂久
(宇多津町地域整備課)

玉井 幸絵
(宇多津町まちづくり課)

藤岡 貴
(宇多津町民)

小鷹 真治

猪野 洋介

久米 智陽

山城 瑞貴

米井 翔子

佐藤 美優

(大阪芸術大学建築学科学生)

【研究の目的】

四国・香川県宇多津町の歴史的な景観を残す古街地区では、建物の老朽化や住まい手を失った空き家の廃屋化、また既に建物が撤去された跡地が空地と化し、歴史的な景観の消失が深刻である。本研究は、大きく変化していく過程の古街の実態を把握し、景観形成の向上に資することを旨とした調査研究である。

【宇多津町概要】

資料によると宇多津町は香川県のやや西、瀬戸内に接する香川県でも最も小さい市町村である。集落は讃岐平野独特の景観を作る平坦な地に突き出た円錐状の山塊群の間を縫い、青ノ山(224m)の裾を北流し、行く手を精通寺山に遮られ蛇行し瀬戸内の海に注ぐ大東川の扇状地に位置する。集落の起源は古代。青ノ山の山裾、大東川の河口に設けられた旧郡の鵜足(うた)郡の津に始まり鵜足津とも表記され、古代より港として栄え鎌倉時代には多くの寺院が建立された。



(図 1)



(図 2) (国土地理院地図をベースに)

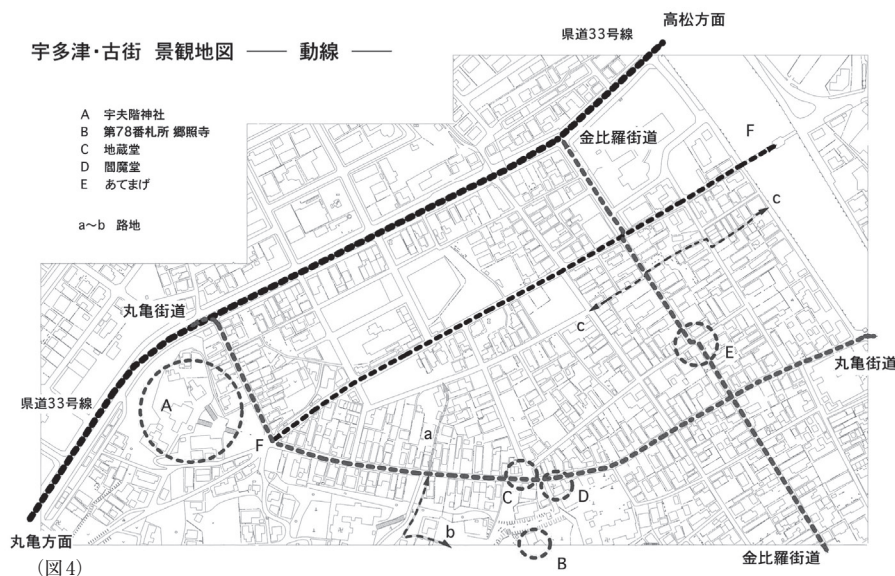


(図 3) (Google Earth より)

江戸時代の中期から昭 47 年の塩田廃止まで、温暖な気候を利用した全国屈指の塩の町として栄えた。後に、この広大な塩田跡地を含む海浜地区は再開発され、観光・商業施設、中・高層の集合住宅や企業団地などの建設等で大きな発展を見せ、人口密度・人口増加率共に香川一となった。

研究対象の地は、かつての塩田地帯と旧集落（古街）を分ける県道 33 号線より以南の地区にある。再開発地区の直線による人工的な区画と異なり、青ノ山北側の山裾に沿うように自然発生的で有機的な“かたち”の特徴と、中世以来から続く寺社の存在はここが歴史地区であることを示す。

古街の歴史的景観は、古来より大東川旧河口左岸に形成された集落の街区の家並みと、街区中央より南行する旧金比羅街道が集落の南で東西に交叉する旧丸亀街道沿いの街並みで形成されている。街道の交差部よりおよそ西に 670～80m の位置、青ノ山の山麓北の小高い瘤のような丘に宇夫階（うぶしな）神社（図 4 A）が位置する。神社階段下の広場には、広場に接し神社を奉る丘の北麓にそって西側から回り込み、広場東側の六叉路を経て青ノ山の山裾を東行する旧丸亀街道がある。



街の一重大行事の秋祭りでは、町内各地区で競って華やかに・豪華に飾られ仕立てられた山車・太鼓台が、神社前広場に奉納のため賑やかに集結する。広場の六叉路からやや北東に共に伸びる街路（図 4 F・F）では祭りの日、露天商の店舗が仮設され祭りの賑わいに色を添える。祭りのクライマックスは太鼓台の御渡（写真 1）である。御渡の道筋は、広場より東に伸びる山側の街路・旧丸亀街道でこの祭り最大の“はれ”の空間となる。



（写真 1）神社前に集結した太鼓台

また、この街道は四国霊場第78番・郷照寺(図4 B、写真2)を経て東行79番・天皇寺に至る遍路道でもある。古街には古くからの社寺やお堂、祠が随所に残り、特にこの遍路道では、棟を連ねる平入りの町家が千本格子・台格子の伝統的な表構えで歴史的空間の雰囲気醸している(写真3)。



(写真2) 郷照寺



(写真3) 棟を連ねる平入りの町家

【研究の概要】

宇多津町において、歴史的景観の保存のため町教育委員会が行った調査「宇多津町歴史的景観活用保存計画策定事業報告書」は宇多津の歴史的景観を調査研究し、その保存やそれらを活かした町づくりの方向を示している。町では景観を活かし育てるために、デザインガイドを定め、歴史的建築物の保存修復、および町家を改修しての宿泊施設へのリノベーション、更に旧丸亀街道、旧金毘羅街道などの舗装をコンクリート・アスファルトとは異なる地道風に改修(写真5)を行っている。しかし、海浜周辺の再開発地区と異なり旧集落の人口の減少と居住人口の高齢化は進み、伝統的な佇まいの多くの建物は老朽化が進み、一部の保全・改修工事の一方で、伝統的な佇まいとはおよそ異なる姿の建て替えもおこなわれている。私たちが古街での踏査を重ねているきわから空き家の廃屋化が進行し、解体・空地となり古街が空洞化していく様は無残である。

この状況は全国の地方都市において同様の症状だ。処方箋もほとんど同様の対応がみられる。都市計画・再開発地区で行われるゾーニング手法によって一気につくりあげられた新しい土地と道路・建物、かつての中心地区を構成していた地区の人気の衰退により労働若年齢層の流失に伴う、人口減少と居住者の高齢化・建物の老朽化である。

そして、如何に街を活性化し若者を呼び込むのかアイデアも展望もまだまだ稀薄なまま、都会からの若者の移入を期待し、若い力による活性化を考える。何れの手法もお上や他に期待する、他力本願志向のステレオタイプ化したものだ。

歴史的空間が心地良いのは、人々が生活を営むなかで時間の経過とともに徐々に形成し蓄積された文化的人間活動の場であるからである。進化論的空間の推移があるからである。

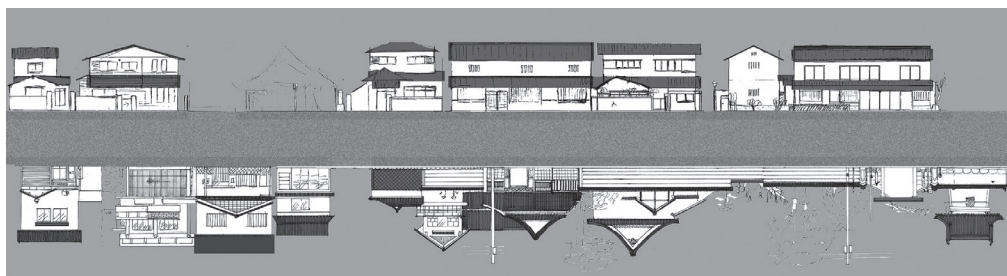
本研究では、次の二点についてワークショップを通して創り出したいと考えた。まずは宇多津古街の景観を活かし、育て、向上させるためには、行政レベル、あるいは上から目線の施策だけではなく、住民の一人一人が景観の維持・向上の意識をもつことが大切であることの自覚を促すこと。次に、かつての伝統的・歴史的町並みの日々の生活の中にあつた歳時の素晴らしい風景を思

い出すことにより、歴史的空間の蓄積された価値を感じる機会を創り出すことであった。

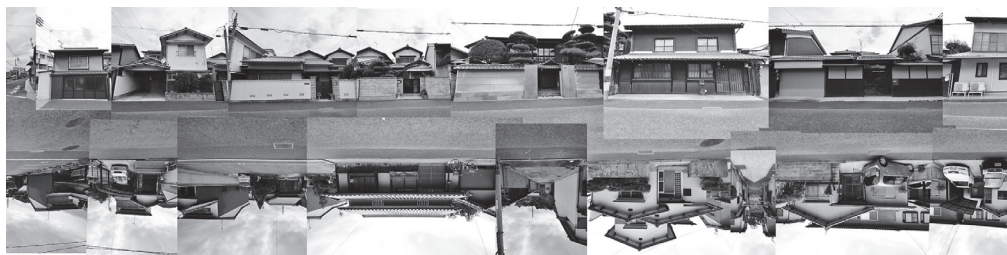
また、古街の様々な歴史的、非歴史的資源を問わず住民が今ある資源を観察・自覚することによって徐々に心地よい空間になる可能性の指摘も考えた。

【調査】

景観調査：古街の景観を構成する要素の現況の姿を視覚的な様相から捉え概観・観察し景観要素を記録にとどめる。調査内容としては、1. 各戸のスケッチ（図5）、2. 各戸の（立面）写真撮影（図6）、3. 通行人からの目線での写真撮影（図7）、4. 端から端まで歩いての動画撮影などを行った。



（図5）各戸のスケッチの一部



（図6）各戸の立面写真をつなぎ合わせたものの一部



（図7）通行人からの目線での写真撮影の一部

建物利用現況調査：古街における建築物の現況を観察、用途別利用の地図化（図8）をおこなう景観要素等を写真撮影、記録にとどめ報告する。

景観資源：道路や街路及び路地、敷地形状、伝統的建築物による家並み、歴史的建築物以外

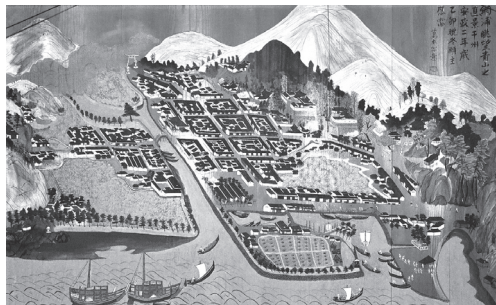
Legend:

- 公共施設
- 商業施設
- 商業用サブテナ・小商店
- 中規模住宅
- 大規模住宅
- 工業・商業施設
- 公園施設
- 公園施設 (公園 公園施設)
- 公園
- 公園

Map Labels:

- Gy 10-18M
- AQUACE

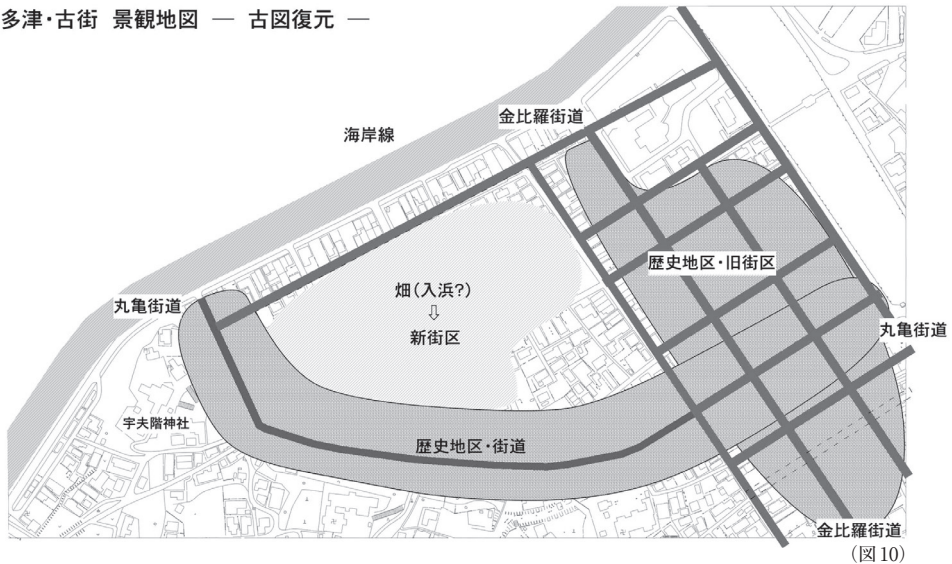
【現況報告・分析】



ヴィジュアルな宇多津の集落を示す歴史的な資料として、唯一宇夫階神社内の金毘羅社奉納の絵馬・網浦眺望青山之真景(1885年・安政2年)(図9)がある。宇夫階神社と丸亀街道、大東川を基準に考えると、海岸線はほぼ県道33号線あたりと考えられる。これと現在の区画図と比定すると南北に流れる大東川左岸と並行する金比羅街道を中心とする東西の区画が一致する。つまり、大東川左

歴史地区の町割り(図10)について見てみると、街道筋は街道に面して短冊形の敷地割りで、通称「うなぎの寝床」と呼ばれる間口に比して奥行きが深い細長い敷地(建物)である。建物の表構えは軒を連ね、「みせ」とよばれる部屋と奥に通じる廊下のような土間の入り口が格子で作られた建具で通りに接する。裏側は、かつては畑や山が迫る未利用地であったのが、市街化が進むにしたがって居住部分へと変化したと考えられる。歴史地区の矩形の旧街区は恐らく当初より四面丁の形式で南北を主軸(海を眺める)とする通りに面していたと考えられる。家屋構成は街道筋に比して若干間口が広いが基本的には同じと考えられる。

宇多津・古街 景観地図 ― 古図復元 ―



(図10)

歴史地区と、新しく加わった地区の特色は明確に分かれる。それは歴史地区の「街並み」の文言が示す意味・内容は、街中で並みであること、つまり普通であること、あるいは同じ程度であることを示す。それは、極めて同じことに徹すること、同じ並びの住戸は同じになることに努力を積み重ねた結果なのである。ところが、近代に新しく加わった地区においては、体制の崩壊により、並であることに努力する意味の喪失感と、拒否、あるいは並ではダメとの価値感の出現である。属する集落との一体感から離れようとの意識の芽生え、多様性の出現である。並であることに重ねてきた伝統の蓄積、或いは繰り返せばある程度普通でいられる安心の空間はもはやそこには無い。つまり、歴史的空間と近代に新たに加わった空間との違いは、一体感を保つ志向性を保持した文言である街並みと、その志向性から離脱し「多様性」への志向性をもつまちなみではもはや街並みとは呼べる意味・内容をなさない。以降、ここではそれを「まちなみ」として仮に区別する文言を使用する。

以上のことから歴史地区の景観を構成する要素は歴史的な蓄積に基づくものである。つまり、それがいかに伝統的な様式に沿ったものかが評価のひとつの指標となる。一方で、新たに加わった地区は多様性の中で個々がその評価に耐える存在感を示さねばならない。

〈幹線道路〉

現況は、宇多津を新と旧に分ける県道 33 号線 (図 4 参照)、これは他地区及び地区内を結ぶ宇多津の幹線道路である。主として車利用を前提とした幅員 20m 前後 (歩道を含む) である。町役場をはじめガソリンスタンド、ドライブイン、銀行、スーパー等の町内及び広域の住民サービスといった用途の土地及び建築物がほとんどである。一方で、沿道にはかつての塩田最盛期の頃の旧集落の佇まいを残す住戸建築や祠・水門(?)の残址らしき物が沿道付近に点在する。幹線道路の性格上通過交通が主となるのはやむを得ないが、古街への旧丸亀街道、旧金比羅街道を始め集落内部への取り付け道を含めて古街らしさを醸す何かは今少し有ってもと考えさせられる現状である。

〈大東川(だいそくがわ)〉

讃岐平野のため池からの流れを集め北流、飯野山(讃岐富士) 青ノ山の東麓をかすめ宇多津町で瀬戸内海に注ぐ。川の水際は石積みで養生した護岸(一部工事中) が施設され、架かる橋は、県道 33 号線に大東川橋、旧丸亀街道に架かる水門兼用の新町橋、二つの橋の中ほどには歩行者専用の仲の橋と三箇所、それぞれに特色があり個性的な風景をつくる。それぞれの対岸から眺める風景も概ね良好であるが、高松方面から大東川橋を渡り最初に目にする町役場とその駐車場は植栽等での工夫が必要と思われる。



(写真4) 大東川の南東を見る。右奥に水門。

〈歴史地区〉

現在の地形図と街並み、江戸期の絵馬(図9)に描かれた宇多津の集落を勘案して推測される旧丸亀街道・旧金比羅街道筋と古街東側のエリアを歴史地区(図10)として把握、調査を進めた。この地区の建築物は基本的には伝統的な表構えの街並みで構成されている。

旧街道：旧丸亀街道・旧金比羅街道であるがいずれも中世からの巡礼街道でもあり、かつての讃岐平野の集落とを結ぶ幹線道路でもあった。ほとんど6m前後の幅員である。最近中央部を地道風の舗装、両側に瓦風のタイルで舗装された歩道(写真5)になっている。中央部の車道と両端の歩道との境界は、高低差なしの細めのグレーチングで覆った側溝により歴史地区に相応しく配慮された高品質の街路となっている。



(写真5) 改修された道のディテール
上から歩道、側溝、車道

旧街区：絵馬からの推測によると、矩形で南北の通りを主軸とした矩形の4面丁で、南北に長めのおおよそ60×40m程度の区画で、南北線は6～8m。東西が4～5m程度。舗装の仕様は旧街道と同様である。

表通り：歴史地区の伝統的家屋や商店では、建物のファサード部分が直接道路に接するが、最近建設された住居建築では庭あるいは駐車場としての利用が多い(写真7)。

伝統的な構法に基づく建築物で落ち着いた佇まいを持ち歴史的空間を構成する代表的な通りは、旧街道筋(丸亀街道・金比羅街道)であるが、古街東側の歴史地区にも多く分布している。伝統的家屋の表構えは基本的には切妻造の平入り(写真3)が多い。旧街道沿いの町並みでは、切妻造の平入りで接する街道の連続



(写真6) 入母屋造りで平入りの伝統家屋

性を保ちながら、他との交差部においては寄棟造あるいは入母屋造(写真6)で交差街路に対する表構えの廻り込みによって、それぞれの街道に対する配慮と共に町並みの連続性を担保し、街道筋と集落の街並みの一体感を示す長い歴史を醸す部分でもある。

伝統的な建築の表構えの主たる造作(台格子・千本格子)やその素材が街並み景観を構成する重要な要素であるとの認識は住民の間では共有されているようである。

注目されるのは最近建設された旧街道沿いの住居建築である。古街の西側、旧街道沿いに新築の住居は目立つが、街道に面して駐車場を確保している空間計画からか、全体的な印象はそれらによって旧街道の景観が暴力的に破壊されている印象はない。



(写真7) 街道に面して駐車場を配した手前の新しい住宅と奥の古い住宅

隣地との境界：コンクリートブロックは、敷地の境界明示及び目隠しとしての機能が主で、モルタル等で化粧を施すが、素地のままの塀も多く見られ、『裏』意識が濃厚で路地と同様に景観要素としての認識は希薄。災害時のことを考えると安易にコンクリートブロックが多用されることは問題である。今回は古街全体にわたるブロック塀調査(塀の長さ、高さ、控え壁の有無など)(図11)も併せて行った。



(図11) 建物利用現況にブロック塀調査を重ねてまとめた図

〈新街区〉

明治以降、集落人口の拡大期に、旧街区のある程度の計画性が見られる直線、矩形、寸法などの様子から丸亀街道筋の集落北側の家並みの背後、畑地(入浜?)部分が新たに開発され街区に加わったものと推測される(図10中央)。街路は東部の街区、あるいは丸亀街道からの畑(入浜?)地区のアプローチ道路により現在の区画が次第に確定したようだ。

新街区の中心となる街路は宇夫階神社から東行、仲ノ橋を経て大東川右岸に達する幸町の街路(写真8、図11の左下から右上へ向う対角線上の道路)である。街路には、網の浦万葉公園・中央保育園・福祉センター・産直市うたづ・倉の館三角邸など宇多津・古街地区の住民の生活の中心をなす通りでもある。幅員はおよそ7～8mに達する。古街一番の広い幅員である。舗装は旧街道と同様の舗装も混じるがほとんどはアスファルト舗装である。街区の特色として住戸の建築はほとんど伝統的な表構えをもたない。

歴史地区での伝統的な表構えの住戸は、「並み」という長い熟成の期間を経ての完成されたスタイルでもある。現在はまさに多様性の時代で「並み」に対応した「まちなみ」の言葉は見つけることができないのだろうか。



(写真8) 幸町の街路

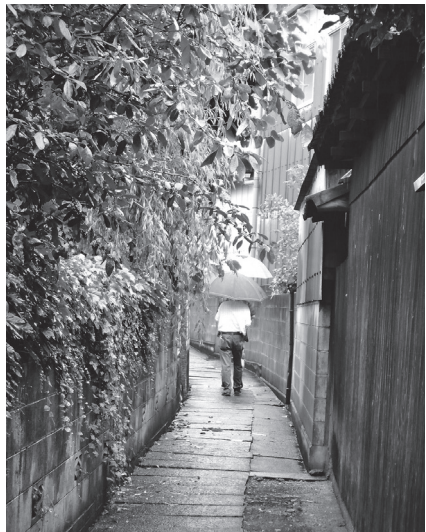


(写真9) 休業中の蛸壺の窯元

《特記項目》

蛸壺の窯元：蛸壺によるタコの捕獲漁法はその発祥の地と知られる明石を始め瀬戸内に広くひろがった漁法である。その素焼きの蛸壺の主たる生産地が宇多津で、最盛期にはその需要のほとんどを賄っていた。しかし、現在その蛸壺の素材もプラスチック製となり宇多津での蛸壺生産は廃れ、後継者不足も合わせて窯元も休業中であった。設備もそのままである(写真9)。

路地：表通りに対して路地は裏道としてサブロード(補助的)的な役割を果たす。補助的といっても実際は生活の幅をひろげ豊かさを保つ重要な役割を担うべき生活空間でもある。古街の幾つかの路地を観察することによって住民の生活の営みのなかで、住民の手による、路地の進化論的变化を確認することができる(写真10)。



(写真10) 街を豊にする路地

《ワークショップ》

住民の歴史的景観の維持・向上への「内発的意識の啓発」をより高めるための具体的な手法としてワークショップをおこなった。その後そのプロセスや意識の啓発に果たした役割についてアンケート調査を行った。ワークショップに参加することによりコミュニティへの関わり、景観向上への参加意識の高まり、当事者である住民が、自ら住む空間が歴史的にも価値が

あり、自らの参加によってそれらが維持されていくことを知る。

ワークショップの具体的な内容は、当初、景観の向上への試みの一つとして既存のブロック塀等に修景の施工を考えていた。ところが候補にあがるブロック塀には施工に耐えられる強度が不足している、あるいは施工後の瑕疵に関わる責任等様々な問題が浮上したことから、塀等の修景に関してはCGによる制作を行い提案することとした。そして、対象地域の広域に関わり、住民の誰でも参加でき、修景の意味を実感できるワークショップとして、別途考えていた竹材を利用した工作物の制作を行った。竹筒による花入(写真14)とプラスチックのプランターを覆う竹材のカバー(写真15)、そして木製ベンチ(写真16)である。作品は町の展示場(こめっせ宇多津)で公開の後、宇夫階(うぶしな)神社から旧丸亀街道沿いに大東川までの町家に配布・施設した。



(写真11) ワークショップの会場



(写真12) 作品の搬出前



(写真13) 作品の設置



(写真14) 花入れの竹筒



(写真15)
竹で作ったプランターカバー



(写真16) ベンチ

〈アンケート結果〉

古街の住人を対象にワークショップ終了後にはアンケート(12項目の質問)を行った。アンケートからは

- 住民の70%しかワークショップのことを知らなかったことは、広報のための時間が十分に取れなかったことが原因と考えられる。しかし、対象地域の半数の世帯から参加者を得たことは評価できると思われる。
- ワークショップに対する6項目に対する住民の評価では、大変満足と満足を合わせると79%であり、概ね好評価を得たと判断できる。
- 引き続きワークショップの開催が必要であることが感じられる。

《終わりに》

歴史的景観については様々な研究機関や行政機関が各種の施策を提案し、成果をそれぞれ挙げている。ただその対象となるのは特別なもの・貴重な存在のものである。今回の研究で私たちが問題としたのは特別なものと普通のものとの距離である。そしてその距離が住民を遠ざけ保存や維持管理を行政に委ね、住民の意識を遠ざけている原因であると考ええる。貴重な街並みもそれを作り出したのは普通の住民であることを忘れてはいけない。

先に挙げたくかつて日々の生活の中にあった歳時の素晴らしい風景を思い出すことにより歴史的空間の価値を感じるをまさに軒内の壁や格子の竹筒に野の花を活けるといった細やかな一歩が、次の一歩に結びついたことをひな祭りへの誘いで知ることになった。私たちの研究の以前から、町の有志の呼びかけでその期間家に伝わるお雛様を開放し展示するイベントが宇多津で根付きつつあった。ワークショップ終了後の雛祭の時には、竹筒による花入が新たに多くの家々に設置され、ワークショップの成果を確認した。

花入以外で、私たちは短期間ではあるが様々な踏査と調査をおこない宇多津の特色ある風景とその可能性を知った。このことは貴重である。いつか近いうちに宇多津の人々にこのことを報告し、話し合う機会を持ちたいと考えている。

私達は今回の研究（調査とワークショップ）で宇多津の様々な人と知り合い、話をお聞きする機会を得た。私達が行ったことは、竹筒による花入といった細やかな仕掛けであるが、それが様々な変化していく可能性を感じることができたことは貴重な体験であった。